

# ムベ

## 1. 原生地と産地形成

原生地は日本、中国、台湾や朝鮮半島南部で、わが国では関東以西の温暖な地域に分布している。ムベ（郁子）は、アケビ科のムベ属に属する。ムベは古くはウベとも呼ばれ、トキワアケビ（常盤開け実）、ヒチゴサン（七五三）とも呼ばれている。中国では野木瓜と呼ばれ、また、「ムベ」の名は、昔、宮中に献上されたので、<sup>おおいえ</sup>大贄（朝廷や神に奉る食料等その土地の産物）、即ち苞苴（オオムベ）、このオオムベからムベになったとされる。

## 2. 分類と品種

ムベ（郁子）は、アケビ科のムベ属に属し、染色体数は  $2n=32$  である。学名は *Stauntonia hexaphylla* Decne. で、属名の *Stauntonia* は、中国を旅したアイルランドの医師で自然科学者である George Leonard Staunton に因んでいる。

ムベには、品種・系統として選抜されたものはない。

### 3. 形態と生理・生態

常緑つる性の木本植物で、葉には長い葉柄があり、互生する。葉は掌状に 5~7 枚の小葉からなり、若枝には 3 葉を生じることがある。小葉は長さ約 5cm、長楕円~卵形、鋸歯はなく全縁、平滑で厚く、無毛であり、長さ約 3cm の小葉柄を持ち、葉の表面は濃緑色で、裏面は淡緑色で網状脈が目立つ。つるは太いもので直径 5cm を超える。

花は雌雄異花で雌雄同株である。4 月下旬~5 月上旬に、新葉または 1 年枝の葉えきから出る短い総状花序に、3~7 個の長い柄のある花を着ける。花には香りがあり、花弁はない。ガク片は白色で淡黄色を帯び、内側には暗紅紫色の条が入る。雄花は合生した 6 本の雄ずいと中央に退化した雌ずいがある。雌花は雄花に比べ大きく、数は少ない。雌花には 3 本の雌ずいと 6 本の不完全な雄ずいがある。

果形 5~10cm の楕円~長楕円形の液果で、10~11 月に暗紫色に熟し、適熟期に地色は緑~黄緑色になる。果皮の厚さは 5mm 程度で、アケビと異なり裂開しない。また、果皮内面部は石細胞と思われる層があり、ざらざらしており、アケビと異なり一般に食用には利用されない。果肉は淡緑色を帯び多汁で甘く、酸味は少なく、カキに似た風味があり、種子を取り巻く半透明状の仮種皮とともに食用になる。果実の中に直径 7~10mm の種子が多数あり、種子は硬く、黒色の光沢がある。

## 4. 栽培管理

### 1) 苗木の繁殖

増殖は実生、挿し木、取り木、接ぎ木で行われる。実生繁殖は結実するまでに年数を要し、果実を早く成らせる場合には挿し木、取り木、接ぎ木により増殖する方が好ましい。また、挿し木活着の難易度は中程度で、春挿しの他、夏挿しでも比較的高い発根苗を得ることができる。

夏挿しは6月下旬～7月に行われ、新梢基部の比較的木化した15～20cmのつるを用い、上2節の葉を残し、鹿沼土やバーミキュライトに上2節が出るように挿し木する。

### 2) 栽培方法

栽培適地は関東以西の温暖な地域である。土質は選ばないが、排水良好でしかも保水性のある肥沃な土壤に適する。植栽場所は日蔭でもよいが、葉に十分な光が当たらないと結実が少なくなる。よく繁茂させるには、株元から出る枝やつるの先端部を剪定する。剪定の時期は5～6月に花を残すように行い、9～10月につるの整理を兼ねて行う。

花はよく咲くが、アケビに比べ雌花の着生は少ない。また、アケビに比べると自家和合性があるとされるが、安定した結実を確保するには受粉を行う必要がある。

## 5. 消費

小葉の枚数が7、5、3で、縁起がよいことから「長命樹」とも呼ばれ、病虫害も付きにくく、庭木や盆栽の他、生け花の素材として利用されている。果実の他に葉も観賞価値があり、庭や公園では、一般に緑陰樹として棚仕立てとされる他、目隠し用に垣根仕立てで栽培される。根には配糖体のスタウトニン等が含まれており、ジギタリスに似た強心効果がある。ムベは西洋医学では強心剤製造原料として利用されるが、漢方としては使用されない。また、民間療法として根及び茎を利尿剤として利用されるが、ジギタリスに似た強心効果を伴い、家庭での使用は好ましくないとされる。果実は生食でき、昔、砂糖の無い時代に朝廷に甘味料として献上されたとの記述もある。